

4:38 エリシャがギルガルに帰って来たとき、この地に飢饉が起こった。預言者の仲間たちが彼の前に座っていたので、彼は若者に命じた。「大きな釜を火にかけ、預言者の仲間たちのために煮物を作りなさい。」

4:39 彼らの一人が食用の草を摘みに野に出て行くと、野生のつる草を見つけたので、そのつるから野生の瓜を前掛けにいっぱい取って帰って来た。そして、彼はそれを煮物の釜の中に刻んで入れた。彼らはそれが何であるかを知らなかった。

4:40 彼らは皆に食べさせようとして、これをよそった。皆はその煮物を口にするやいなや、こう叫んだ。「神の人よ、釜の中に毒が入っています。」彼らは食べるができなかった。

4:41 エリシャは言った。「では、麦粉を持って来なさい。」彼はそれを釜に投げ入れて言った。「これをよそって、この人たちに食べさせなさい。」そのときにはもう、釜の中には悪い物はなくなっていた。

4:42 ある人がバアル・シャリシャから、初穂のパンである大麦のパン二十個と、新穀一袋を、神の人のところに持って来た。神の人は「この人たちに与えて食べさせなさい」と命じた。

4:43 彼の召使いは、「これだけで、どうして百人もの人に分けられるのでしょうか」と言った。しかし、エリシャは言った。「この人たちに与えて食べさせなさい。【主】はこう言われる。『彼らは食べて残すだろう。』」

4:44 そこで、召使いが彼らに配ると、彼らは食べて残した。【主】のことばのとおりで

あった。

ききんがあっても王は、宮殿にいて豊かに食べられたでしょうが、預言者は違います。エリシャも多くの後継者を育てながら、彼らの生活までも面倒を見て活動しました。主のみこころを行う者は、単に真理を伝達するだけではなく、人々の生活や心にも寄り添う必要があります。本当の「神の人」とは、ききんのような苦難に際しても、共に生きる人です。

ここに記された毒の出来事と、パンの出来事は様々な解釈があります。「毒が入って」とあるのは言語では「死が入って」という意味ですから、毒は比喩的な表現で、強烈な苦さを表しているのかもしれない。また研究者によればコロシントウリという植物で、だとすれば薄めれば食も可能なようです。しかしこれを超自然的な主のわざと考えると差し支えないでしょう。パンも20個を100人で分けるのですから、大きさによっては奇跡とは言えないかもしれません。

解釈は一つではありませんが、ここで明確になるのは、エリシャの信仰と人柄です。ききんを弟子たちと共に苦勞して乗り越え、知恵と知識をフル回転させ、主の奇跡にも期待しました。また自分にもらった「初穂のパンも」、全員には足りないからと言って自分のものにするのではなく、むしろそれを分け合うことを学ばせているようでもあります。

主のみわざはこように、多くの現実的な出来事の中で、主の目的と主のみこころに生きる人々によってなされてゆくのです。現代でも列王記の時代と同じく、有力者は神をないがしろにする人々かもしれません。しかし私たちは現実の中で、信仰と希望と愛を实践しつつ前進しましょう。その希望は、5000人にパンを与えられた主イエスから与えられます。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

